

介護老人保健施設しおさい

症例概要 ご利用者：80歳代 女性 要介護3

利用期間：令和3年7月～現在

(令和3年8月、令和3年11月～12月、尿路感染症のため入院)

既往歴：2型糖尿病・糖尿病性皮膚潰瘍・白内障(両目手術)

入院による入退所を繰り返し、さらには施設内クラスターを受け、断続的に活動に制限のかかった期間を経て、身体機能、認知機能は徐々に低下、生活動作は全介助となる。一時は看取りの状態であったが、他部署との連携で取り組み、段階的に活動性の向上がみられるようになった事例

内 容

入所時は、他施設持ち込みによる褥瘡、易疲労性、座位姿勢の不安定さもあり、食事や水分補給以外はベッド上で過ごす時間が多い生活でしたが、令和3年8月、尿路感染で入院、嚥下機能は低下し再入所時には食事動作は全介助となりました。11月～12月、再度、尿路感染症で入院、さらに、令和4年2月、COVID-19施設内集団感染に伴う感染拡大防止対策のため、活動性の低い状態を余儀なくされました。断続的に活動に制限のかかった期間を経て、身体機能・認知機能は入所時に比べ低下、生活動作全般で介助が必要となりました。

また、集団感染の終息以降は、傾眠傾向で、活気や自発的な発語もほとんどなく、四肢・体幹の過緊張、易疲労でリクライニング乗車後も姿勢の崩れが目立ちました。それでも、視覚、聴覚からの刺激を多く感じ、極力、日中を車椅子上で生活できるように褥瘡予防・栄養調整・血糖コントロールの調整など、他部署と連携のもと進めてまいりました。

すると、離床時間が長くなったことで、覚醒レベル・体幹の筋力は向上し、リクライニング車椅子乗車中はご自身で上半身を起こそうとされるような動きがみられるようになり、自発的な発語も少しずつ増えていきました。集団体操中は、上下肢の動きも多くなってきましたが、覚醒や注意の持続が困難なため、ご利用者の体操中の上下肢の動きの誘導や声かけを行うようにしました。6月中旬、職員の体操のカウントと一緒に数えるかけ声が聞かれるようになり、ご利用者皆さんへの問いかけに対しては、自発的に「はい」「そうですね」「元気です」など笑みを浮かべ答える場面もみられるようになりました。他ご利用者からは「あの人は話ができるんだね」と驚きの声が聞かれることもありました。納涼祭では職員の援助で紙の金

魚すくいをされ、敬老会ではビデオレターや職員の出し物を疲れた表情もなく、微笑ましく見つめ視力が弱いながらもイベントを感じられている様でした。

現在、集団体操では、近位での声かけや職員による補助がなくても、手足の小さい動きが見られます。左側の視認不良で職員の動きはあまり見えていませんが、職員の言葉に耳を傾け、最大限に力を発揮しようとする姿には、ご本人の生きる力強さ、懸命さを感じられます。生活動作は全介助となり、一時は食事も食べられず看取りの状態であったことが信じられないほどに、明るい表情でお話しされ、今では3食の食事を楽しみにされており入所当初からは見ることの出来なかった素敵な笑顔を見せてくれます。